

# 幻想からの覚醒を

上 廣 榮 治

創立五十周年記念式典が盛大に挙行されてから、早くも一年が過ぎました。また、本誌が『倫風』の名のもとに内容を一新してから、今月号で二年目に入ります。

昨年、私はこの再出発にあたる二度の機会に、相通ずる一つのことを皆様にお話いたしました。ご記憶でありましょうか。

五十周年の式典で申し上げたのは、戦後五十年の見直しということでした。世間では、戦後五十年のねじれが言われ、構造改革、組織や制度の改革が叫ばれている。しかし、問題は組織や制度にあるのではなく、その大本にあるのではないか。私たち一人一人の心のあり方、生活の仕方をこそ初心にかえって見直すべきだ。日本人の内面的な変革こそが、今急がれている……そう申し上げたのでした。

また、『倫風』創刊号では、私たちが自分たちの活動に無反省になり始めていないかとも問いました。五十年を経た組織をさらに活性化し発展させていくためには、馴れ合いや慢心を排除し、絶えざる反省と気付き直行こそが大切である。会の発展は会友一人一人の自浄努力にかかっている。『倫風』はそのための道しるべであり、会友が切磋琢磨する場でもある……そんなお話を致しました。

あれから一年、残念ながら世の姿は何の前進も見られません。押し寄せる国際化と情報化、東アジア圏の伸長に取り残される日本経済、産業の空洞化、組織や制度の硬直化、高齢化社会、あまりに享樂的な風俗など。それに対するに、日本の制度や組織は戦後五十年の遺制いせいを引きずっていて、新しい現実に対応できずにいます。相変わらず日本人は大きな岐路きろに立って、戸惑とまどっているかのようです。

では、そうした社会の大本をなす人の心はどうでしょう。まだ、日本人はあげて同じ「幻想」の中に生きているのではないかと思われてなりません。そんな馬鹿な、と言われるかもしれませんが。

しかし、思い起こしていただきたいのです。例えば日露戦争後、日本は一流国だ、神国日本の軍隊は世界に冠たる無敵の軍隊だと誰もが思った時代がありました。幻想に酔い、厳しい現実を見ないままに、世界を相手にまことに愚かな戦争に突入しました。戦後になると、多くの知識人や学生、労働者たちが社会主義の幻想にとりつかれました。革命がすぐそこまで来ているかのように信じ、ソ連が理想の未来像に見えたのでした。幻想を見て現実を見ない点では、戦前の不敗の軍隊幻想とどこか似通っております。やがて、日本は経済大国だ、経済成長は永遠に続くという幻想まねんが蔓延まんえんしました。それとともに、土地や株の神話や、消費を善しとする物への信仰も生まれました。

繰り返します。日本人は今大きな岐路に立っています。それは厳然たる現実です。それにもかかわらず、今なお多くの日本人は、景気さえ回復したらまた何かなるだろうという淡い幻想の内にあるかのようです。少なくとも、本気で生き方を改め、生活あやまを変え、過あやまちを正そうとはしておりません。

たしかに、厳しい現実を直視し異を唱えることは重い技です。でき得れば、みんなと一緒に気楽な幻想に身を委ねたいと思うのが人情です。だから私たちは、多かれ少なかれ幻想の中に生きているのです。

現実をさておいて、自分を過大に思い、他者が自分を必要としている、認められていると思いたいのです。幻想を大肯定して、自分の甘い認識と現実の乖離には目をつぶりたい、反省などしたくない、というのが誰しも抱く無意識の本音なのであります。

それに対して、一年前の「初心にかえって自ら顧みることから始めよう」「反省力、自浄能力を高めよう」という私の提案は、しごく当たり前で簡単なようであり、実はまことに厳しい実践を求めたものであったのです。それに皆様がどうお応えくださったのか、それは皆様お一人一人の問題です。

入会してまだ日も浅いある若い女性は、絶えざる反省を求められても何をどう反省してよいのやら見当もつかなかったとおっしゃいます。そこでその方は、ともかく「五つの誓」のうち一つだけでも徹底して実践してみようと心に決めました。「三つの無駄を排す」がそれでした。まず、生活の中で「物の無駄」を無くしてゆきました。買い物もそのつど「これは本当に必要だろうか」と自問しました。家中の不要なものも整理しました。「時の無駄」は、朝一日の計画を立てることと朝の時間の活用を中心に行ないました。「心の無駄」は、「プラス思考」だと理解して、実行しました。一年経ってみると、生活も家計も随分スリムになって心も軽くなりました。しかも気がつくのと、いつの間にか社会を見る目までが、「三つの無駄」の観点に立っていたと嬉しそうにおっしゃるのです。思わず私も、「そのうちきつと、これまで見えなかった自然が輝いて見えてきますよ」と、声をはずませたものでした。

壮年のある男性会友は、この一年の間に「自浄能力とは、まず問題発見の能力だ」と理解したとおっしゃいました。そして、日々の仕事と日常において、自分の位置がどこにあるのかを問い直し、自分が充分職責を果たしているかどうか、他の期待に込んでいるかどうか、家庭における自分の責任とは何か

等々、不<sup>ふ</sup>断<sup>だん</sup>の見直しをはかったと言います。その結果、それまで見落としていた無数の問題を発見したのです。そして「一々の問題にいか<sup>も</sup>に倫理に悖ることなく対応するか」を追求するなかで、「新しく大地に生き貫く」ということの真の意味を実感することができたのです。

教育問題に悩んでいたある主婦は、自分の教育観を改めて反省したと語ってくれました。一流大学への進学が子どもの幸せの道だという漠然たる思いは幻想ではなかったのかと。そして、子どもが何をもって幸福だとしているのかを虚心に話し合い、自分の考えを押しつけることをやめました。結果は申すまでもありません。子どもも親も、現実から乖離していた幻想から醒め、親子の会話と家族の愛和が復活し、子どもは生き生きと自らの幸せを求めて勉強を再開したのです。

この三つの実践例に見るまでもなく、倫理の実践はどこから始めてもよく、できるところから始めればよいのです。迷ったら、「五つの誓」に戻り、あるいは大自然の声を聞き、あるいは他者の言葉に真摯に耳を傾ければよいのです。それこそが実践倫理流の、世の幻想から抜け出す方法であるのです。

私が最も恐れる幻想は、実は、倫理、倫理と言いつつ暮らしているうちに、自分はまことに倫理的な立派な人生を歩んでいると思ひ込むことです。他者の声が聞こえなくなり、問題発見の能力を失い、自分の自立した実践を忘れることです。倫理ボケとでも名付くべきこの陥<sup>か</sup>穽<sup>せ</sup>は、私たち一人一人の身近に、常にあるのだということを、私たちはよくよく自戒しなければなりません。

わが会が五十年の歩みを全うし得たのは、絶えざる反省と、現実を忘れることのない地道な実践の賜物でありました。世があげて幻想に生きるのならば、せめて私たちだけでも幻想から目覚め、現実をしつかりと見据えて、よりよき未来のために歩を進めなければならぬと、申し上げておきましょう。